天上家の壁

古川大輔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
天上家の壁

【Ｎコード】
Ｎ６８３０Ｑ

【作者名】
古川大輔

【あらすじ】
ごくごくありふれた家庭の天上家（あまがみ）。メタボで冴えない一家の主、海。ひきこもり生活を満喫する長男、新。学校では優等生でも外では・・・長女、渚。わんぱく盛りの小学生、陸。そんな家族を支える美空。天上家の家族に起こる奇想天外な出来事。天上家の未来は絶望と破滅へと向かっていく・・・

1

1

ここは天上家。
ごくごく普通の中流階級の家庭だ。
大黒柱でもあるこの家の主人、海。
高校を卒業後、地元の不動産会社に就職。それなりに仕事をこなし、それなりに人と付き合い、それなりに恋愛を楽しみ、結局は幼馴染の美空と結婚。
現在は三人の子をもうけ、人生の折り返しに差し掛かったメタボ予備軍の５０歳。

今年も残りわずかとなった年の瀬。
天上家に一人の来客者が訪れた。
「お待たせして申し訳ありません。」
白髪まじりの頭を何度もさげながら、美空の顔を見るわけでもなく部屋の奥へと案内されていく。
襖を開けた部屋には海が無表情で煙草をふかしていた。
部屋に入ってきた美空と白髪まじりの頭の男性に気付いた海は慌てた感じに煙草を灰皿にもみ消した。

「わざわざお越しくださって・・・」
海がまだ言い切らないうちにその男は、
「いえいえ、こちらの不手際でご迷惑をお掛けしてしまったのですから」
額の汗をハンカチで拭いながら男は手に持っていたかばんから一枚の名刺を取り出した。

「このたびは当社の製品をお買い上げいただきありがとうございました。」
名刺には商品営業部部長・田中靖と書かれていた。
「体の具合はいかがでしょうか？」
田中は海の表情をじっくり見ながら、引きつった顔で伺った。
「いやいや、そんな大袈裟に騒ぐほどのことでもないんですがね」
手を大袈裟に振りながら海は苦笑いした。

この一ヶ月前、海はあるカタログを見ていた。
「メタボさよなら！」
大きく赤い字で書かれているカタログを手に海はそこに書かれている電話番号に電話をかけた。

海は日ごろから健康には気をつけていたが、５０歳になって体力の衰えを感じ始めていた。
毎朝の通勤時の駅の階段を半分ものぼらないうちに息が切れてしまう。
仕事の合間には必ず何か口に入れている。
ベルトの穴が２つも手前になってしまった。
この間は、電車の中でズボンのホックがピンっと外れてしまった。
あきらかに太ったお腹をさすりながら海は決心した。
「ダイエットしなきゃ！」
その決意とともに、新聞の折り込みチラシに目を止めた。
ダイエットグッズの通信販売だ。

電話から数日後、海にその商品は届いた。
早速箱を開けると、中にはビニールでグルグル巻きにされたベルト状のものが入っていた。
海はそれを取り出し自分の腰に巻く。
電源のスイッチを入れると、そのベルト状のものは細かな振動をし

はじめた。
「おぉぉ・・・」
高くいやらしい声をあげる海。
手元の切り替えスイッチで強度を選べる。
小、中、大。海は順番に強度を上げていった。
「これはいい！こんなので痩せたら楽だね～」
海はご満悦といった表情でその商品の取扱い説明書を読んでいた。

その商品は腰に巻き、振動をお腹に伝えることによって、脂肪を燃焼させる効果があるらしい。
海は運動とかが昔から苦手だったため、ダイエットも長くは続かなかった。
そんな海にはピッタリのダイエットグッズ。
この日から海は家では毎日腰にこのベルトを巻いていた。

巻き続けて一週間、海の体に異変が起こった。
お腹のあたりがどす黒く変色しているのだ。
お腹は痩せた様子もなく、体重も減っていない。
ただ変わったのは、お腹の表面の色。
内出血してるかのように、出っ張ったお腹が痛々しく変色している。
異常を察した海は、近くの病院に行った。
すると、病院の先生からは驚くことを言われた。
「天上さん、申しあげにくいんですが・・・」
「ハイ・・・」
「内臓に異常をきたしてると思われます。」
「え・・・！？」
海は何を言われてるのか分からなかった。
ただ、この病院の設備では詳しい事は分かりかねるといったことだ。
それで海は大きな総合病院を紹介してもらい、日をあらためて、また検査をすることになった。

2

この日、天上家の長男、新(しん)は部屋にこもったきり出てこなかった。
新は海と美空の第一子、現在２３歳のフリーターである。
高校を卒業後、定職に就くわけでもなく、アルバイト職を転々としている。
学生時代は特に目立った生徒でもなく、かといって登校拒否などもまったくなく、無遅刻無欠席、成績も優秀であった。
しかし、就職活動や大学受験などはまったくせず、気が向いたときにアルバイトに行き、小遣いを稼いでは趣味のラジコンを買って楽しんでいた。

新はこの日もラジコンをもって、近くの公園へ出掛けた。
平日昼間の時間帯は、人がほとんどいないガランとした公園。
新にとっては絶好のラジコンコースとなっていた。
いつものようにラジコンカーを快調に走らせていると、新の目にいつもはそこにないものが入ってきた。
旅行かばんのようなものが公衆トイレの脇に無造作に置かれている。
新は気になりかばんの方へと歩み寄っていった。
かばんの口はしっかり閉まっているが、中身はパンパンなのか大きくかばんが膨らんでいる。
新はそっとかばんのチャックを開けてみた。
中には有名デパートの紙袋が入っていた。
その紙袋もゴツゴツした感じで、中に何か入ってるような感じだ。
新はその紙袋を取り出し中をのぞいてみた。

新は自分の部屋に帰ってきていた。
のどが渇き、ジュースを一気に飲み干した。
新の部屋のベッドの上にはさっき公園で見つけた旅行かばんが置か

れている。
新はそのかばんの方をちらっと見て、ニヤリとほくそ笑んだ。
どことなく体が震える。興奮しているのか、武者震いのように小刻みに新の体は震えていた。

新はかばんの中から紙袋を取り出した。
「こんなことってあるんだな・・・」
何度見ても中身は変わらない。頬をつねってみる。
夢ではなさそうだ。新の顔からは笑みが消えない。
紙袋の中には１万円札の束がギュウギュウにつまって入っていた。
束にはまだ銀行の帯がされていて、おそらく１００万の束だろうと思われた。
新はその束を１つずつ取り出して目の前に積んでいった。

「２８・・・２９・・・３０・・・」

１００万の束がちょうど３０個。
「さ・・・３千万円・・・」
新の生唾を飲み込む音が静まり返った部屋に響き渡った。
「やっぱり警察に届けたほうがいいのかな・・・」
新は自分がどうするべきか、頭がまったく回転しなかった。
目の前に積まれた３億円。今まで新が手にしたことがあるのはせいぜい２０万ぐらいだ。
そんな新の目の前には見たこともないような大金が積まれている。

「これだけあれば、一生遊べるな」
新は心の中でそうつぶやいた。
とにかくお金をこのままにしてはおけない。
元にあったように紙袋にお金をしまい、それをまたかばんにつめ、クローゼットの中にしまった。

新はこの時にようやく、公園にラジコンを置き忘れてきたことに気付いた。
気が動転していたのか、かばんが落ちていた場所にラジコンをそのまま置いてきてしまった。
部屋を出る前にもう一度クローゼットを開け、かばんを確認する。
新はさっきの公園にまた向かうことにした。

3

小学校では冬休み前の最後のイベントが行われていた。
毎年恒例で、全校生徒が体育館に集まり、各クラスが出し物をするというもの。
合唱であったり、演劇であったり、各学年、各クラスが色々と趣向をこらして出し物をする。
そしてこのイベントが終わって冬休みへと入るのだ。

6年2組の出番は次へとせまっていた。
今回の出し物を決めるにあたって中心になって案を出したのが陸(りく)だった。
そのためか、他の生徒より若干緊張している感じだった。
各クラスの学級会で、まず出し物を決めるときにイベントを率先して盛り上げていく班長を決め、班長を中心に何人かのグループを作って、今年の出し物の提案を出し合っていく。
陸は6年2組の班長でもあった。

陸は学級会で、演劇をやる提案を出した。
もちろんその時は賛否両論、クラスの半分の生徒から反対を受けていた。
演劇となると、演技はもちろん脚本からセット作りから、なにかと大変なことはみんな分かっていた。
だからほとんどのクラスはあまり手の凝らない合唱を選んだりするのだ。
仮に演劇を選んだとしても、とても演劇とは言いがたいもので、とても真剣な演技をしてるとは思えないような、失笑のこぼれるような劇を見せられるハメになるのがオチだ。

それでも陸はどうしても演劇がやりたかった。
陸側についてるクラスメイトの押しもあり、どうにかこうにかみんなは納得した。
というより納得せざるを得なかったのだろう。
陸はクラスでもやんちゃな存在で、常にまわりからは一目をおかれていた。
陸のまわりには数人の男子生徒が常に慕うように引っ付いていて、このクラスでなく学校中から悪ガキグループとして見られていた。
今回のイベント班もそのグループで結成されたもので、他の生徒からしたら彼らの意見に反対など出来なかったのだ。

陸はひそかに想いを寄せる子がいた。
同じクラスの橋本千里だ。
小学生なのにどこか大人びていて、いいとこのお嬢様っていう感じだ。
陸は千里とは1年の時からおなじクラスであったが、まともに口をきいたことがない。
女子に対する免疫がないのか、どう接していいのか分からないでいる。
他の女子とはそれなりに接することも出来るのだが、千里の前に出ると人が変わってしまったかのように固まってしまうのである。

陸は小学校生活最後のこのイベントにある計画を立てていた。
自分の書いた演劇の台本で、千里を自分のものにしてしまおうというのだ。
ストーリーなんか二の次で、千里を自分に近づけるだけの話を考え作った。
そして率先して班長に名乗り出て、今回の提案をしたのだ。
まずは第一弾めの計画が成功しただけで、まだ千里が役を引き受けるとは決まっていなかった。

それから数日後の学級会、陸は早速書いてきた台本をみんなに配った。
配役はまだ書かれていない。
「配役は投票で決めたいと思う」
これも陸の作戦通りだった。
すでに陸のグループの他のメンバーがクラスの3分の2を味方につけていた。
味方というより言い聞かせていただけだが。
その中に千里は含まれていない。
千里と仲のいい友達も含まれていない。
クラスの男子全員と女子数名。それだけがすでに陸のグループの形となっていた。

陸が書いてきた台本はとても演劇と呼ぶには甚だしい、なんともいえない内容だった。
一組のカップルがいろんな場所をデートするといっただけの幼稚な話。
手をつないで、あちこちを飛び回る。最後は何故か抱き合って終わる。
まさにストーリーよりも陸の欲望が際立った台本だった。

クラス全員による投票が行われた。
結果は分かりきっていた。
主役の男は陸に決まった。
そしてその相手役の女は、千里に決まった。
もちろん、投票はすべて仕組まれたものだ。
陸はすべてがそうなることが分かっていた。
それでもわざとらしく笑ってみせる。
「橋本さん、頑張ろう！」

千里は顔を赤らめて、照れ笑いを浮かべていた。

4

「え～と・・・永世会病院・・・」
海は以前行った病院から紹介してもらった総合病院の前に来ていた。
電車で1時間、大きな門構えに入り口脇には大きな木がそびえ立っている。
この門から病院の建物の入り口まではゆうに１００メートルはあるだろうか。
入り口の前はちょっとしたロータリーのようになっていて、タクシーの乗り降りが頻繁に行われている。
一見ホテルと勘違いしてしまいそうな光景だが、そこは病院。車椅子の患者や松葉杖をついた患者が散歩をしているので、なんとか病院らしさをかもし出している。

海は一息ついて、お腹をさすりながら病院の中へと入っていった。
受付をさがす海はあたりをキョロキョロと見回した。
大きな吹き抜けの天井は、どこか異空間に引きずりこまれそうな壮大感があった。
そんな海にエプロン姿のおばさんが近づいてきた。
「どちらへおこしですか？」
そのおばさんは笑顔で海に尋ねる。
「あっ・・・えっと・・・診察を受けにきたんですが」
この病院の案内係だと察知した海は持ってきた紹介状を見せながらそのおばさんに事情を説明した。
「あぁ、それでしたら2番の受付へどうぞ」
海はそのおばさんに頭を下げながら、おばさんが視線を送った先のほうへと歩きだした。
言われたところの受付カウンターの上には2番の数字が書かれている。そこには若いナースが座っていた。

「あの～、天上と申しますが・・・」
海は先ほどの紹介状をまた出しながら、さっきの案内係のおばさんに説明したのと同じように若いナースに説明した。
「少々お待ちください」
ナースは手元のパソコンをたたきながら何やらデータを呼び出している。
「天上海さま、ですね」
「はい」
「お伺いしております」
すでに海のことはこの病院に通っているのか、ナースはすぐに応対した。
「ではこちらの用紙にお名前と住所、電話番号、それから下のアンケートをご記入してください」
渡された用紙には名前などを書く欄の下にアンケートみたいなものが5問ほど書いてある。
とりたてて難しい質問もなく、すぐに書き終えた海はその用紙をナースに手渡した。
「では、こちらの番号札を持って2階の外科診察室の前でお待ちください」
渡された番号札には「11」と書かれていた。
「11番目ってことか？」
海はボソッとつぶやいた。
ナースには聞こえたのか聞こえなかったのか、ナースは軽く海にむかって会釈をした。

2階にのぼると待合用のソファがズラッと並べてある。
そこには診察を待つ患者がバラバラに座っている。
海は言われたとおり、外科診察室のむかいのソファに腰をおろした。
隣には左腕を三角巾で吊るした若い男性が座っていた。アゴ髭をたくわえ、眉間にしわを寄せ、待ってるのが煩わしいと言わんばかり

に右足をカタカタ揺らしている。
海はあまりそっちの方を気にしないように静かに目を閉じ、番号を呼ばれるのを待った。

１時間近くは待っただろうか、ようやく海の番号が呼ばれた。
隣には湿布のにおいをさせた、おじいさんが座っている。
その前を横切ったとき、おじいさんはタンの絡んだいがいがしい咳をした。
海は一瞬のけぞったが、気にしていないふりをしながら診察室のほうへとむかった。
診察室のドアを開けると、若いナースが立っていた。
「こちらへお掛けください」
案内されたほうに行くと小さな丸椅子があり、その前に先生が座っている。
「天上さんですね」
先生は低音の声を響かせるように言った。
海より5歳ぐらい若そうなその先生は、大人の色気をかもし出している。
海はどこか気後れした感じになった。
「これから天上さんの診察を受け持ちます、秋山と申します」
と、海に名乗ってからさらに話し出した。
「前の病院からカルテやレントゲン写真を見せてもらったんですが、もう一度詳しく検査をしたいと思います」
海は今思ってる疑問を素直に秋山に聞いた。
「どういう状況なのかちょっとでも教えてもらえませんか？」
さらにまくし立てるように海は言葉を続けた。
「詳しく、詳しくばかりで、肝心の症状をまったく教えてもらえない・・・」
「ものすごく不安なんですよ～！」
最後は強い口調で、それでいて何かに懇願するかのように海は秋山

に素直な感情をぶつけた。
しかし秋山は冷静な口調で、
「天上さん、不安なのは分かります。ただ、どういった症状かを説明するにはまだ検査をしないとはっきりした事は言えないんです」
そう言って秋山は立ち上がった。
「では天上さん、こちらへ来てください」
海は秋山に言われるがままそちらの方へむかった。
秋山が部屋の仕切られたカーテンを開けるとベッドがあった。
「こちらへ横になってください」
そう言って秋山はその横にある機械のスイッチを入れた。
「今からこのエコーで天上さんのお腹を検査していきます」
海のどす黒くなったお腹のあたりにエコーを当てながら、秋山は画面をじっと見つめている。
あまりにも真剣な表情に海は一層不安が増していった。
海の体は脂汗でびしょ濡れになっていた。

5

少女は駅のホームのベンチに腰をかけ、通過する電車を見送った。
かれこれ何本の電車を見送っただろう。その少女は走り去る電車の向こう側をボーっと見つめていた。
何故か少女の手にはマスカラが握られている。

天上渚（なぎさ）。
天上家の長女として生まれる。現在地元の女子高に通う１６歳の高校２年生。
明るく活発で、クラスでも学級委員を務め、部活のテニス部では引退した３年生に変わりキャプテンをまかされるようにもなっていた。
誰もが認める才色兼備、決して人に弱音を吐かない、しっかりとした女の子だ。
ただ彼女には誰にも言えない秘密を抱えていた。

事の始まりは高校２年に進学したばかりの春先、学校帰りのコンビニでのこと。
部活を終えた渚は帰り道にある家の近くのコンビニに立ち寄っていた。
特に何かを買いに来たわけではないのだが、自分の意識とは関係なく、何の気なしにチョコレートを手に取りカバンの中に入れたのだった。
そのまま渚はコンビニを出て、家に向かって歩き始めた。
家に帰った渚は、高鳴る鼓動に快感を覚え、さっき盗ったチョコレートを手に不敵な笑みを浮かべていた。

それからというもの、渚は毎日そのコンビニに立ち寄り、ガムだったり、乾電池、化粧品、缶ジュースなど、かばんにすぐ入れれそう

な小さなものばかりを盗んでいった。
これが絶対に欲しい、必要にかられるといったものではないのだが、目に付いた盗りやすそうな物を1日1個ずつ万引きしているのだった。
ただ単にスリルを味わうためだけに、コンビニに足を運んでいた。
毎日何も買わずに出て行くのも怪しまれると思った渚は、たまに何かを買ったりして、怪しさを紛らわせたりもしていた。

万引きが日課となっていた渚。もうそんなことが半年は続いていた。
夏から秋へと移り変わる、涼しい気候。
この日も渚はいつものコンビニへ来ていた。
そして例のごとくコンビニ内をうろつき、それとなく商品を物色する。
渚の目にとまったのはマスカラ。
普段化粧なんかまったくしない渚には必要だとは思えない物だが、盗るのに欲しいか欲しくないかの理由はいらなかった。
渚はマスカラを1つ手に取り、レジの店員から死角になる方へと行き、あらかじめ開けてあったかばんにスッとそのマスカラを放り込んだ。
それから渚はペットボトルのお茶を手に取り、レジの方へ向かった。
盗る時とはまた違った緊張感が渚の胸を締め付ける。
レジで会計をすませようとする渚のかばんにはさっき盗ったマスカラが入っている。
レジの店員は男子大学生のアルバイトか、事務的にレジをうっている。
渚が差し出したお茶を手に取り、バーコードをレジに通したと同時に、いきなりそのアルバイトの男が渚の手を掴んで言った。
「天上渚・・・」
あまりにも突然のことに、渚は声を失っていた。
その男はさらに、

「今日はマスカラか」
と渚の顔の前に自分の顔を近づけて、小さな声でささやいた。
渚はつかまれた手を振りほどき、一目散にコンビニを出て走った。

バレていた・・・・・・

渚は今まで自分が万引きをした時の光景をフラッシュバックさせていた。
決まった時間に行っていたコンビニ。
そうだ、レジにはいつもあの男がいた。
渚の頭にさっきの言葉が響き渡る。
「今日はマスカラか」
渚は必死に走った。
何も考えられなかった。
家とは逆方向に走っていた。
気がつくと通いなれた地元の駅のホームにいた。

渚はベンチに座り、じっと一点を見つめたまま動かない。
右手にはさっき万引きしたマスカラが握られていた。

6

天上陸は緊張していた。
いよいよ本番だ。
体育館の舞台袖で自分の出番を待っていた。
現在舞台では前のクラスの合唱が行われている。
陸は千里の姿を探した。
千里は仲の良い女友達と楽しそうに喋っている。
緊張していないのだろうか・・・？
陸は千里のことを不思議そうに見つめていた。

練習中何度となく失敗をした。
セリフを間違えたり、次の動作を忘れていたり。
間違えるのは決まって陸のほう。
千里は完全にセリフを覚えていた。
陸が書いてきた台本なのに・・・と心の中では誰もが思っていた。
場の空気が悪くなると、陸は教室を出てどこかに姿をくらますことが何度かあった。
陸にとっては、NGなんてのはもっともプライドが傷つけられること。
みんなは絶対に陸を責めないが、陸にはみんなの気持ちが手に取るようにわかった。

一度、教室を飛び出した陸は、そのまま家に帰ってしまった。
しかしその日の夜、天上家に千里がやって来たのだ。
教室に置きっぱなしにしていった陸のカバンをわざわざ届けにきたのだ。
出迎えた母親の美空が陸を呼んだが、陸は部屋から出てこなかった。
「ごめんね、わざわざ」

美空は千里に言った。
千里は陸の部屋のほうを見ながら、美空にカバンを渡し、頭を深くさげて天上家をあとにした。
その後、陸の部屋にカバンを届けにきた美空は、
「かわいい子だね。惚れてるの？」
とおどけながら言った。
「バカ言うなよ」
陸は顔を赤らめながら、美空を追い払うように手を振った。

次の日、教室で千里を見つけた陸は軽く挨拶をした。
千里のほうも笑顔で陸に挨拶をした。
この日から陸の態度は一変する。
練習で失敗することはなくなり、しっかりとセリフも覚えているのだ。
他の生徒たちはとまどいと驚きが入り混じった表情で二人の演技を見ている。
このとき、初めてみんなが思った。
ちゃんとした演劇になるんじゃないか？と・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6830q/

天上家の壁

2011年10月8日18時14分発行